

木下英一郎さん
磐田市産業部農林水産課主査

「予算ゼロでのスタートでした」と、木下主査。お金がなくて、どうやってコースづくりをという疑問に、「地元のボランティアの皆さんのお陰です。大勢出てくれて、予想以上に早くコースが仕上がりました。冬などは、「うちの課の職員が、猪汁などつけて、ボランティアの皆さんにふるまったり」、お金が使えない分、手伝って下さるボランティアの方々への気配りは、あの手この手であったのだから。コース管理で、一番大変なことはという質問に、「やはり、ボランティアの皆さんとのコミュニケーションですね」と、開発当初からの気苦労は今も続いているようだ。

平忠弘ガイド
わん：てんガイド事務所
日本山岳ガイド協会所属

毎週、磐田市の主催するトレッキングツアーのガイドも務める平さん。とにかくコースに精通している。かつ、日々、プロの目からのコースメンテナンスを欠かさず行ない、自らコースの改善改良を施しているという。平さんは、このコースにまつわる故事来歴にも、とにかく詳しい。平さんの歴史講話を聞くと、この地域が何百年と続く悠久の地であることを認識させられる。

榊原悟さん
磐田市産業部農林水産課
農林水産振興グループ主事

「婚活トレッキング企画もあるんですよ」と、今回取材の窓口となってくれた、農林水産課の榊原主事。「すでに、数組のカップルが誕生しました」と、企画の成果に嬉しそうな榊原さん。もしかしら、この婚活企画が、獅子ヶ鼻に呼び込むもっとも強力な企画となるかもしれない。

田中将博さん
磐田市産業部農林水産課
地籍調査グループ副主任

登山道の階段は登山者から嫌われるが、この獅子ヶ鼻の階段は、高さや幅とも、なかなか絶妙なバランスでつくられていて、他の登山道の階段のように歩きにくい。「階段づくりには、けっこう課の職員がかかわっているんですよ」と得意そうな田中さん。

獅子ヶ鼻の標識整備は特筆ものだ。標識そのものの素材を、耐久性の観点から、交通標識と同じものを選択した。「コスト的には、通常の山の標識より高くつきました」木下主査。長いスパンで見れば、管理面からも、かえって得するという判断から採用したという。

「基本の標識は、まず見やすさと目立つことに重点をおきました。道迷いや、日が落ちてからも、反射効果などにより目に付く仕掛けだ。道路標識素材と同じにした理由が理解できる。しかも、「個々の名称は、バックをブラウンにしました」。環境配慮からのビジュアル統一。ソフト面からも、しっかりと企画されている標識計画である。



この岩は隆起したものでなく天竜川の上流から押し流されてきたものだ。うだ。丸い石がいつばい詰まっているのがその証です。遠州灘を望む、穏やかな登り下りのコース



スルところか、よじ登ると表現したほうがふさわしい峻げんさである。尾根に出ると、まさに断崖絶壁、垂直の壁が切り落ちている。またもや怪石。いまにもグラリとしそうな「浮石」の傍を恐る恐る抜ける。「三疊岩」からサクラ台分岐を通過し、今度は奇岩「こうもり岩」に、真つ二つに割れた「親千岩」の先が、コースの最終ポイントとなる「鐘掛岩」だ。頂上の向こう側は、

平さんの案内で、普段は行けないポイントも含めて10の見所ポイント巡りの終了だ。歩行時間4時間、まずまずの行程だろう。そして、この

「蟻の戸渡り」と言って、このコース最大の難所です。愉快そうに語る平さん。目の前の切り立った岩場をスルスルと登って行く。スルスルという想像がこれまた覆される。コース中の最高点である岩村山259mを通過して、脇道に入り痩せ尾根へと向かう。

これまた切り立った断崖絶壁。「地元の消防署が、署員の度胸試しにここに来るんですよ」と木下さん。ロープで身体を固定して、断崖の上から身を乗り出すそうだ。



獅子ヶ鼻の好期は冬にある。温暖な気候のエリアということに加え、空気が澄み渡り、真つ青な冬空が、遠く太平洋まで広がる。冬こそ、このコースの、旬。と言える。



トレッキングレポート

獅子ヶ鼻 トレッキングコース

獅子ヶ鼻トレッキングコースは、静岡県西部、天竜川東岸豊岡地区の山間部の中に、標高200mクラスの、いくつかの小ピークを基点にして構成されている。自然林と植林が混成する中を、全長5kmちかい、心地よいアップダウンがうねっている。

磐田市農林水産課の主導のもと、「サポーター倶楽部」と命名されたボランティア集団が主体となり開発し、現在も管理維持に従事している。

豊岡支所で、磐田市農林水産課の、木下さん、榊原さん、田中さんと落ち合う。早速、スタート地点である、獅子ヶ鼻公園に向かう。そこには、地元のボランティアで、日本山岳ガイド協会に所属する、平さんが待ち構えていた。今日の案内役を務めてくださる。

「獅子ヶ鼻には見所ポイントが合計10ヶ所あります」と平さん。今日はそのすべてを回らせてくれるとのことだ。里山のスケールアップ版を想像していたが、岩場も多く、そこそこ奇岩怪石が、そこかしこに現れる。

ローカル線の旅から始まる
新幹線掛川駅から、天竜浜名湖鉄道に乗り換える。一両だけの電車は、遠州灘の山合いを、トコトコと縫って行く。ローカル線の旅そのものだ。獅子ヶ鼻トレッキングコースの登り口である、敷地駅に到着。所要時間約30分。これまで東京から1時間半余、待ち合わせを入れても、2時間半前後だ。首都圏からの意外の近さに驚く。静岡県というより、愛知県に近いという感覚が覆された。

の面前的いわれです」と。ただの岩の突起にしか見えないが、「この上に行く」と分かります」と平さん。いきなり512段の階段が始まり、早くも息が上がる。登りきった所の歴史広場が、獅子ヶ鼻の撮影ポイントになっている。なるほど、ここから眺める先ほどの岩の突起は、見事に獅子の鼻に変身し、空に向かって突き出している。